

慈眼寺たより

第4号

平成20年7月
春日井市下市場町
「慈眼寺」

電話 81 6801
編集 伊藤秀文

下市場を見つめて六〇年

伊藤清雄

コンコンコンコン。掛矢の音が朝から響いている。家の隣に建売住宅が一〇軒ほど建てられている。以前はすべて畑であった。この広い畑の真ん中の少し南に寄ったところに直径九メートル位、高さ二メートル位の狐塚があった。伝説は知らないが、石ころだらけで夏には蛇が沢山いたし、木の実を啄みに多くの鳥がやってきた。この狐塚に榎と、くるがねもちの太木があった。根本には倒れかけた墓碑が四本ばかりあった。この木に登ると八メートル程上になり、周りがすべて見渡せた。まさに絶景が手にできたのである。登っている木の枝が折れて落ちそうになっても、下の枝が支えてくれて一度も怪我をしなかったのは、今思うと不思議な気がする。この狐塚も平地にならされ、今は家が建っている。

議な気がする。この狐塚も平地にならされ、今は家が建っている。

伝説はすでにない

狐塚 新緑

それまでは郷中に居たのだが、江戸時代の終わり頃、下街道に面した北町内の今の所に祖先が越してきたらしい。子供の頃は郷中へ行くのに、藪の坂道をおりて、沢渡池の堤防を通り、地蔵川の橋を渡り、お墓の横を通らなければならなかった。夜は真暗闇で、夏は食用蛙が鳴いて怖かった。このお墓がともも広く、その周りはジャングルであった。渋と甘のまざった柿の木も少しはあったが、棘のある低い木（蛇結茨）が多くはびこり、木通（あけび）もはびこっていた。茨と木通が絡まり人の進入を阻止していたが、ここの木通は大きく色も青紫

色のきれいなものが多く、子供には宝物であった。場所が場所だけに子供の勇氣と冒険心を試すもので、学校から帰るや否や仲間と木通をとりに行ったが、木通は蔓なので入り込むところがないのである。茨を掻き分け掻き分け、小さな通り道を必死になつて作るのだ。もちろん棘に引つ掛かり、傷はつくし服は傷むが、そんなことは言っておられない。一列行進だ。「押すな」「あつ」。その頃は使われていない所（我が家もその中にはいる）が多く、周りをジャングルで囲っていた。本当に偶ではあるが、腐った棺桶が抜け、足を突っ込んだこともあった。

下市場の方々のご尽力により、そのお墓も今は整備され、お寺の南のほうに移され墓石の数も多くなり、もちろん土葬ではなく足を突っ込むこともない。お墓のあった場所は下市場公園となり、元気な子供たちの喜々とした声が一日中響いているし、早朝はお年寄りの方々のゲートボールの会場になつている。今年梅も桜も大きく満開であった。

話を少し変えて、曹洞宗から出ている「禅の友」にも曹洞俳壇があるが、下市場の文化のひとつに俳句がある。秀文さんの父君の俳号戯舟さんとの俳句仲間に加えて頂いたのが、まだ二〇代の中頃であった。以来ずっと俳句仲間であったが、その戯舟さんも亡くなられ来年は二三回忌を迎えられるという。時は寡黙に過ぎていくようだ。

《青柳俳壇》

仏壇に 空席があり

薄暑くる

戯舟

片陰を 出て焼香の

列に入る

戯舟

ふと馬のいななきが

下市場の辻

清雄

木戸道を 慈眼寺へ急ぐ

盆の風

清雄

おお榎 えのき 五輪の塔の

よしす 葦簣かな

久幸

般若心経 私見

住職 春日井浩道

摩訶般若波羅蜜多心経というお経があります。法事などで真つ先に読まれるお経です。摩訶(まか)とはマハトマ・ガンジーの(マハ)と同じ言葉で、偉大なという意味です。「経」というのは縦糸のことで、あるテーマについて論じた一まとまりの文章を意味します。「般若」とは知恵のこと、「波羅蜜多」は「らみつた」とは、完成とか成就とか言うような意味です。つまり、このお経は「知恵の完成すなわち悟りについての基本大綱」と言うような意味になるのでしょうか。こういう意味で、このお経は仏教の真髄をあらわしていると言われます。仏教は悟りの宗教と言われているからです。

このお経は、お釈迦様が、知恵第一と言われた、弟子のシャリープッタ(舍利子)に話してきかせた形式をとっています。「いいか、シャリー君、こうなんだよ」と言うような調子です。そして冒頭は有名な「観自在菩薩、行深般若波羅蜜多時、照見五蘊皆空、度一切苦厄」で始まります。その意味は、「カンジザイの修行者が、深い悟りを求めて修行していたとき、五蘊はみな空であるということを見極めて、一切の苦しみを解決し

た」ということになるでしょう。

ここで観自在菩薩という者がいきなり出てきますが、これはいわゆる観音様のごとく、観自在というのは観ることが自在、すなわち固定観念に囚われることなく物事の本質を見抜く」といった意味でしょう。これは、お釈迦様の修行の姿勢そのものを表しているのです。つまり旧来の世界観を破って真理を求めた姿勢を表したものだといえましょう。だから、ここは「観世音菩薩」でなくて「観自在菩薩」でなければなりません。つまり、この冒頭は「ワシが観自在の立場から深い悟りを求めて修行していたとき・・・」となつてきます。このように理解してはじめて、この冒頭の一文が大きな意味を持つてくるのです。これを「観音様が五蘊は皆空であることを見極めた」と理解したのでは、全くの付け足しになつてしまいます。

そのあと、「色不異空」「色即是空」「空不異色」「空即是色」の文句が出てきて、さらに「不」とか「無」など、色々を否定する言葉がやたら続いています。このあたりが、自在の観点からすべてを観察して見極めた結果に当たります。いわく「現象世界はすべて空なのだ」。問題はその「空(くう)」「の意味です。この「空」を「移り

変わって実体がない」というような解説を見受けますが、すべてのものが移り変わっていくということとは、誰でも自然を観察すればすぐに分かることです。そんなことが悟りの内容であるはずはないのです。たとえば「この箱は空だ」というとき、箱の中には何も入っていないよという意味であつて、箱の存在は否定されません。だから「空即是色」と続くのです。誤解を恐れず言つてしまえば、すべて存在するものは、それ以上のものではないということ。すべ

ての物は、ありのまま、ありのまま・・・生きるということも、死ぬということもただそれだけのこと。目の前の現実を離れて本当の真理があると思つたら大間違い。このように考えれば、心無礙すなわち「心にこだわり無く生きる」になつてきます。「どうしようもないこと」にこだわらな。これが生きていくための一番大事な知恵だということ。忘れてはならないのは、この平凡かつ深遠な結論は厳しい自然観察の結果として導き出されたということです。

松本サリン事件で被害者の家族方が「怨む」ということは自分の人生を無駄にすることだ」と言つておられました。まさにそういうことだと思ひます。

お盆のお知らせ

柵經の日程

- 八月十二日 浅山、鳥居松
 - 勝川、名古屋方面
 - 八月十三日 四谷、南部
 - 熊野、神領方面
 - 八月十四日 旧下市場郷中
 - 八月十五日 穴橋、関田、上条
 - 高蔵寺、坂下方面
- 原則として、各戸別にお知らせをしています。ご不明な点はお尋ねください。

お施餓鬼

- お施餓鬼は、毎年八月十八日今年八月十八日になります。七月一日から受付をしております。早い時間帯は、予約済みになっております。ご希望の方はなるべく早めにお申し込みください。電話で結構です。お布施は今までどおりで、初盆施餓鬼 五万円
特別大施餓鬼 三万円
大施餓鬼 二万円
合同施餓鬼 一万円 です。

精霊流し

八月十五日の午後四時半から慈眼寺の山門で、檀方総代の方にお願ひして集めてもらつております。まとめて供養のうえ処分しております。明るいうちにお持ちください。

梅花講たより

慈眼寺梅花講は、三クラスに分かれて練習をしてきましたが、五月から、新人組の三組が、熟練組の二組の仲間入りをしました。それによって、一カ月に一回の練習をする一組と、人数が十七名になり、一カ月三回の練習をする二組とになりました。



右の写真は、一組の何時もの練習風景です。足の痛い人は椅子に座ってお稽古をし、又耳の遠い人が多いので、ゆっくり大きい声でお話をします。八〇歳代半ばから九〇歳近い人達ですが、皆さんとっても元気で大きい声でお唱えし、途中の休憩時は、楽しい話で盛り上がりします。

平成20年6月16日



五輪塔について

慈眼寺の裏二百メートルほどのところの駐車場の片隅に、五輪塔が立っています。これは、戦国時代に活躍した武將、梶田繁政のお墓です。



梶田氏は、織田信長の頃に、美濃の加茂郡加治田村というところから、当地にやってきました。繁政の先代、直繁の時です。有名な

蜂須賀小六などと一緒に秀吉に仕えました。平成八年に放送された大河ドラマ「秀吉」にも出ていました。また、司馬遼太郎の「太閤記」にも登場しており、こちらでは篠木荘に住んだと書いてあります。このころは加治田という苗字を使っていたようです。やがて福島正則家の家老になって、広島に行きますが、福島が徳川幕府にとまれて、信州松代に改易になると、繁政は故郷下市場に帰ってきます。ここで尾張徳川家から千石で仕えないかという誘いを受けますが、自分はここで隠居するからと、代わりに息子を差し出します。

繁政は寛永五年この地で亡くなり、ここで埋葬されました。繁政とその父直繁の位牌は慈眼寺にあります。この位牌の厨子には風林火山でおなじみの、武田菱の紋所が記されており、これは、梶田氏が武田一族の末裔と称したこと表れなのでしょう。

五輪塔は文化十年、繁政の子孫によって建てられたものですが、それは繁政の死後二百年ほど経つてからのことです。当時はこうしたルーツ探しが武家の間で流行ったのでしょうか。

そして、この梶田氏の子孫は明治維新まで尾張徳川家に仕えられ、今も名古屋市に住んでおられます。

当地との関係が判明した時の、梶田家の当主はやはり「繁政」というお名前でした。そして先年の整備事業には寄付までいただきました。また、去年の夏には、尾鷲市から梶田という方が尋ねてこられました。この方は何と繁政の弟の子孫だということでした。

あとがき

本堂前の梅の香りから、薄暑も終わって本格的な夏となり、供花のお守りも大変な今日この頃となりました。

慈眼寺は年を重ねるにつれ、渋みと貫禄が出て、木造建築の良さを醸し出してきました。

みなさまの力で出来上がったお寺を守っていく中で、年二回の「慈眼寺たより」の発行は檀家の心をつないでいくものだと思っています。

次号からも、皆様の原稿をお待ちしております。短歌、俳句、川柳など何でも結構です。お気軽にお寄せ下さい。編集子

「慈眼寺たより」 第四号
平成二〇年七月十五日 発行
ホームページ

<http://www.mna.cmw.ne.jp/jigenji/>